

令和7年度新旧合同実行委員会報告

日頃よりPTA活動にご理解ご協力をいただき、誠にありがとうございます。

令和7年4月26日（土）、Zoomにて令和7年度新旧合同実行委員会が行われましたので下記の通りご報告いたします。この委員会は、今年度新たに各委員会の委員長・委員になられた方々と昨年度実行委員を務めていただいた方々にご出席いただき、令和7年度PTA定期総会報告書の報告事項を審議するために行われました。

また、PTA総会は集会形式ではなく、さくら連絡網を使用したWeb書面による審議とさせていただきます。報告事項の詳細については、5月10日（土）にさくら連絡網で配信いたします。

会員の皆さまにはお手間をおかけ致しますが、ご理解ご協力の程、よろしくお願いいたします。

記

1. 福山会長挨拶

今日は合同実行委員会ということで、新しい委員候補の方に入っているといっています。それでいきなりとなるようすけれども、現行の委員の方はもちろんのこと、新委員候補のみなさんも含めてどうしてもお伝えしておきたいことがあります。それは委員業務の「効率化」についてです。

そのことをお伝えするにあたって、少しでもご紹介したいドラマのエピソードに触れたいと思います。いつも突然のお話を差し込みすみません。

事前にお伝えしておきますと、このコーナーは本校の実行委員会の中でも、歴代最も「非効率」な時間であると自負しているところです。新しい委員候補の方は少し驚かれる方がいらっしゃるかもしれません。その反対に、現行委員の方は・・・多分もう、毎回呆れているものと想像します。それも今日で終わります。お気持ちに余裕のある方は、よろしければお付き合いください。

ところでその「効率化」のエピソードと言いますのは、以前私が偶然見かけたドラマで、江戸時代の末期を描いた時代劇がありまして、ひょんなことから「將軍職」を得ることになってしまった人物の苦悩を描いた回がありました。しかもメインのストーリーとは直接関係のないシーンです。最近はどうもテレビドラマを見ることはほとんどなくて、もうずいぶん前のお話しです。

その「將軍役」を演じた方は私の好きな俳優さんで、なんとも言えない妖しさが溢れている、どこか危険な魅力を持った方です。

そのドラマのとあるシーンで、その側近役が偶然にも、「將軍」自身の苦しみを知る機会がありました。その役柄は、一般には最高権力者とされる「將軍職」にあっても、周りにいる側近達からは陰で「無能」であると噂ばかりされていて自身がただの「お飾り」であることを十分に理解しつつも、それに耐えて毎日を送っています。

その孤独な「将軍職」を続ける中で、その側近に対して呟いた言葉がありました。その「お飾り」の立場にあることを、小さな水槽の中で飼われる「亀」に自身を例えて、そのことがどんな孤独感や苦しみを伴うものであっても、それを誰にも打ち明けられなくても、それでもあてがわれた役割を全うするために、ただこの場に居続けること。それが自分のつとめなんだと。そんなことを言うシーンがありました。

そのシーンを偶然目にした当時の私は、実は共感というよりは怒りに似たような、率直にはそんな印象を持ちました。そう言いますのは、生きることは、有難くも最低限健康体であるならば、生きるということは、それはただ呼吸をすることではなくて社会とか誰かのために活動することであると、当時そんなファイティングな考え方を持っていたからだと思います。どこか思いあがっていたんだと思います。それでもなぜかその「亀」のエピソードが、ずっと私の心に残っていたんです。

このお話からひとつ言えることは、この「亀」に例えられた存在は、当時実際に忙しく活動していた実働部隊とか執行部門の人たちにとっても、あるいは、現代のチームに当てはめても、それは等しく極めて「非効率」な存在であるということだと思います。可能ならばもっと優秀な「将軍」を配置して的確な指示や議論を行なって、誰もが「効率的」に業務を進められるように出来ないのかという感想を持ちました。

当時のこの「非効率」な印象が、偶然見かけたドラマのワンシーンに感じた怒りの正体だったと思います。

時間を江戸から、私たちがいる現代に戻します。お話は変わらず委員業務「効率化」の話です。

今の世の中ではどこに行っても「効率化」が叫ばれています。これを唱えない者はまさに排除される世の中と言っても良いかもしれません。

もちろん「効率化」を否定するはずありません。この2年間だけでも委員のみなさんと一緒になっていくつかの課題に対して、大変恐縮ですが、かなりの「効率化」を進めることが出来たと感じています。委員の方たちにおかれましては、全くのお世辞なんか抜きにして、本当によくご尽力くださいました。

それでもそうした中で、決定的に取りこぼしてしまったこともあります。それは特に、実際に連絡を取り合う際のコミュニケーションの方法についてです。もう少し説明いたします。大切なことなんです。

普段は委員のみなさん方に、適宜連絡を取り合っていて、それで業務を進めていただくわけですが、その際のツールの在り方について、最初にしっかりとお伝えしておけばよかったという後悔のようなものがあります。

もちろん便利なコミュニケーションツールを使うことはどんどんやっていただきたいです。

具体的に言いますと、手軽さの順番としてはまずメールやメッセージアプリなど文字を使ったものです。センシティブな情報を扱う場合には十分にご留意いただくことが前提とはなりますけれども、こちらは簡単な意思疎通とか、共有したいファイルを添付したりする場合に有効かと思います。

その次は「時間」を合わせる必要はありますが、オンラインによる対話ミーティングです。こちらは近年社会に登場した大変便利なツールであることはご承知の通りです。

そして「時間」と「場所」を合わせないといけないのが「対面」によるお話しです。「対面」でのお話しは、近年では最も「非効率」なコミュニケーションとなってしまいました。それでも、ここで注意が必要です。

人が発信するメッセージアプリなどの文字情報では、発信する側の持つ意図と、受信する側の持つ意図がイコールになることはほとんどないはずなんです。また、そのときの双方の体調ですとか微細な感情の動きによって、その文字メッセージの受け取り方が異なる場合があるかもしれません。文字だけの情報からその真意を読み取ることが出来ないまま、受け手の想像力によってマイナスの感情が増大してしまうことだってあります。

私たちは同じではないという前提。もっと言えば私たち個人の中にあってもそれこそ朝と夜、季節によっても、そのときの感情とかコンディションが常に一定であることはないという前提。

それを、もっとはじめに伝えれば良かったと。ここにいる委員の方でも、ご自身の業務の中で何かを伝えたいのにうまく伝わらなかったり、誤解された内容が伝わってしまったことがあったんじゃないかと思うんです。傷ついてしまった方がいたかもしれません。どうして初めにお伝え出来なかったのか、私の力不足によるものだったと、これが私が最も後悔していることです。

そしてこのことが、新しい委員の方たちにお伝えしたかったことでもあります。リモートやメッセージでのやり取りにおいては、実は一定の信頼関係の構築が必要になるということ。さらに言いますと、信頼関係が仮にあったとしても、全ての意思疎通が出来るわけではないんです。

本当に大切な場面では、もし状況が許せば、実際に逢ってお話するという。私たちは同じではないという前提を受け入れるということ。少し冷たく聞こえてしまっていたらすみません。

私がこのお役目で取り組んできたことで、特に後半の1年間は学校の外の業務に比重がかかってしまった状況がありまして、概ね本校にはあまり還元出来ない内容だったように思います。

それは、ここではつまり多くの委員の方にとっては、先ほどの「亀」のエピソードみたいに、少なくとも私の業務の在り方というのは幾分にも「非効率」なものだったということです。実際に業務を行っていたのはほとんど全てが現行の委員の方と、その熱量によるものでした。

このことについて、私がもっとたくさん動くべきだったんじゃないかとか、他にも何か思うところがあるという委員の方がいらっしゃるのも、これもまた承知しているつもりです。それはずっと感じていたことでした。先ほどご紹介した委員どうしのコミュニケーションのあり方のみならず、私の力が至らずすいませんでした。

それでもこのなぜかずっと治らない体調不良の中で私が考えついたことは、ここはひとつあの時代劇の「將軍」のエピソードにあやかって、このお役目に踏みとどまって、誰かに何を思われても、何を言われても、ただ、この場に居続けることだけでした。それはある意味では、この時代において「非効率」を体現し続けることでもありました。

それでも、幸福を感じることもよりも忙しいことに価値があるかのようなこの現代において、もしお気持ちに少しだけ“余白”が残っているなら、場合によっては「非効率」についてじっくり考えてみるのもたまにはいいんじゃないかという、ちょっとしたご提案でした。伝える方がいらっしゃいましたら幸いです。もちろん運営の在り方は次の世代のみなさんにお任せいたします。

そして先ほど私たちは同じではないという前提。そう言い切ってしまいましたが、よく探せば実は最大の共通点があったりもします。普段は意識しないことではありますが、私たちは全員、いつ何時でも同じ“宇宙の暇人”どうしであるという共通点です。

このことについては何千回も考えたんですけれども、このずいぶん広いらしい宇宙の中で、それこそ委員業務でどっちが頑張るとか、誰かがずるいとか、気に食わないとか。宇宙の中でもそうですね、銀河系の中だけでもかなりローカルな場所にあるこの星の、そのまたローカルな場所のローカルな活動をしていて、そんな感情を持ち出すことに高い価値があるとは、私にはどうしても考えられないんです。

毎回極端過ぎることばかりはお伝えしてきたんでしょうか。何か心に思うことがある方でも、もしよかったらこれからも、同じ“宇宙の暇人”どうし、すれ違ったときにはご挨拶させていただければ嬉しく思います。

さて、最後のご挨拶はひょっとしたら悪質な言い訳をお話する回になってしまったのかもしれませんが、この辺りで今まで長く続いた「非効率」なコーナーもそろそろ終わりにしたいと思います。

現行委員のみなさんと一緒に過ごした１年間、あるいはこの２年間は長いようで短い“ショー・タイム”のような時間でしたが、いかがだったでしょうか。

くだらないですか。つまらなかったですか。

それとも苦笑いくらいの点数はいただけますか。最後までお付き合いくださったみなさま、心から感謝いたします。以上、“宇宙の暇人”Ｆ山がお送りしました。

2. 大木校長先生挨拶

本校ＰＴＡの皆様、おはようございます。

日頃より、本校の教育活動にご理解とご協力を賜りまして、ありがとうございます。

校長の大木直之でございます。昨年度に引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

今年度は、７９名の新一年生を迎え、児童数は５１８名、４１０家庭でスタートしました。

新学期が始まり、入学式・始業式から３週間が経過します。保護者の皆さまの温かいご支援のおかげで、こどもたちは元気いっぱい学校生活に取り組んでおります。新しい担任の先生、専科の先生、教科担当の先生、そして新しい友達との出会いの中で、少しずつ学校生活のペースをつかみ、成長している様子が見られます。こどもたちが毎日新しいチャレンジを楽しみながら過ごしている姿は、私たち教職員にとっても大きな励みとなっています。今後も、こどもたちの健やかな成長を見守ってまいりたいと思います。

さて、本日はＰＴＡの新旧合同役員会・新旧合同実行委員会ということで、旧役員・実行委員の皆さまには、これまでのご尽力に心よりお礼申し上げます。こどもたちのために多くのお時間と労力を割いていただき、学校運営を支えてくださったことに、深く感謝しております。ご家庭やお仕事との両立がいかに大変であったかを拝察しながらも、皆さまの努力が本校のこどもたちにどれほど大きな影響を与えてくださったかは計り知れません。本当にありがとうございました。

また、新しく役員や実行委員を務めてくださる皆さまには、これからの１年間、大変お世話になります。今後の活動の中では、これまでとは違う課題や新たに取り組むべきことが出てくるかもしれませんが、こどもたちのために、ぜひお力をお貸しいただければ幸いです。

学校としても、ＰＴＡの皆さまと連携を深め、こどもたちの成長と安全を第一に考えた取り組みを進めてまいります。保護者の皆さまの知恵や経験を活かしていただきながら、教職員と力を合わせて、こどもたちにとってより良い学校生活を作り上げていきたいと思います。

これからの１年間、どうぞよろしくお願いいたします。

以上、挨拶とさせていただきます。

3. 檜本副校長先生挨拶

PTAの皆様、おはようございます。副校長の檜本です。

私からご挨拶を一言、述べさせていただきます。

まずは令和6年度の旧委員の皆様、PTAのお仕事へのご尽力、一年間本当にありがとうございました。大変お疲れ様でございました。

皆様方には、子ども達のために色々な楽しいイベントの企画や運営、安全安心のためのパトロール、きれいな広報紙の作成、入学式・運動会・学校公開等でのお手伝いなど、様々にご協力いただきました。

皆様の子ども達を思う熱い思い、フットワークの軽さ、協力し合うネットワークやチームワークなどに頭が下がる思いでいっぱいです。

これからも、令和7年度新委員の皆様と教職員一同、連携・協力し合い、子ども達をすくすくと真っ直ぐに育てていきたいと思えます。

今年度も何卒よろしくお願いいたします。

4. PTA定期総会 報告事項についての審議

- ① 令和6年度 PTA事業報告
- ② 令和6年度 PTA収支決算報告
 - 収支決算報告
 - 会計監査報告
- ③ 令和6年度PTA定期総会報告事項
 - I. 越中島小学校PTA会則改正について
 - II. 各委員会オンライン名簿の公開について
 - III. 横断幕の貸出に関する運用案について
 - IV. さくら連絡網の使用継続について
 - V. さくら連絡網の外国語対応オプションについて
 - VI. 都小PTAのIT支援事業（zoom 料金割引）利用について
 - VII. 顧問の選任について
- ④ 令和7年度 PTA事業計画案
- ⑤ 令和7年度 PTA会計予算案
- ⑥ 令和7年度 PTA役員及びPTA会計監査の選出について
(令和7年度本部役員候補者名簿、令和7年度委員会名簿 参照)

以上6事項に関し、本新旧合同実行委員会にてご承認いただきました。

内容の詳細につきましては、令和7年度PTA定期総会報告書をご参照ください。



2年間、本部役員を務めさせていただきました。「できることを、できる人が、できる範囲で」をモットーに、私らしく貢献できたと自負しています。活動を終えた今、共に活動した方々と「私たち、本当に頑張ったよね。楽しかったね」と笑い合える関係を築けたことが、私の財産となりました。

この2年間は、子どもたちのために頑張ったつもりでしたが、振り返れば、私自身の成長や喜びにもつながっていました。皆さまと駆け抜けた時間に、感謝しています。

私はこれで本部役員の任を終えますが、今後は一保護者として、引き続き学校に関わってまいります。これから本部役員・委員を務められる皆さまが、それぞれの持ち味を活かしてご活躍されることを、心より応援しています。

越中島小学校PTA本部役員 尾山 紘子



令和6年度の各委員会の委員長・委員のみなさまには、

お忙しい中、実行委員として1年間PTA活動にご尽力いただき、

本当にありがとうございました。

令和7年度の各委員会の委員長・委員のみなさま、

これから一年間よろしくお願いいたします。



“人格の分断”を意識し始めたのは私が小学校高学年くらいの頃でした。“それ”を観た瞬間に、自分の中の意識がバラバラになったというより、自分の中身がバラバラであったことを自覚したというべきかもしれません。

数十年前のある日、家族旅行で関東近郊の広い美術館を訪れたことがありました。そこは施設内の展示だけでなく、庭そのものが美術館になっていて、拝観者は散歩を楽しみつつ展示作品を眺めることができます。

そんな中、いがぐり頭の少年は“とあるオブジェ”の前に呆然と立ち尽くしていました。

子どもながらになぜだか胸をかきむしられるような、そんな感覚を持ちました。しばらくの間そこに立ち続けていましたが、なんだか自分自身を見ているようでその作品を凝視することが出来ません。とにかく全てがバラバラでした。

アート作品というのはそれを見たり聴いたりする受け手によって、アーティストの意図とは全く異なるものになることがあります。その製作者がどんなものを見て、何を感じてこの作品を世界に発信しようとしたのかは想像するしかありません。タイトルには邦題で『断絶』とありました。

自身の中身がバラバラであると書きましたが、それでも大別すると概ね三つに分かれています。

「マルイチ」人間関係やコミュニケーションなど、対外的なものを担当しています。

周囲の人と対話するのはほとんどがこの「マルイチ」です。特に外国の文化やニュースなどにアンテナを張り巡らせて活発な情報収集を行っているほか、それほど労せず発話してくれるので便利です。

呼吸をするように齒の浮くようなワードをちりばめ、ときに暴走し交流を広げ過ぎて疲弊してしまうなどの欠点があるので、正直かなり面倒なやつです。大人になってからは多くの人たちの間に立って常にバランスを取ろうとし、その場を取り繕うことに特化したある種の「ペテン師」です。

具体的な計画やその実務を担当しているのは「マルニ」。

物事をなんでも階層構造化して世界を整理し、合理的・効率的であることを価値の最善とし、何かの作業や計画を実行する際には便利な「優等生」タイプと言えるかもしれません。他者を信用せず、実務作業やプロジェクトは独りあるいはごく少数のチームだけで進めようとしています。

古典的な唯物論者であるためひどく理屈っぽく、目に見えない非物質的なものや役に立たない非効率なものに存在価値を認めようとせず、おまけに愛想が悪く無口で面倒なやつです。我が国の伝統や質実剛健など武張ったものが好きで、気に入った素材のグッズなどを収集する癖があります。

そして最後に「マルサン」です。そいつはひどく子どもっぽく感情的で猜疑心が強く、常にこの世界を裏から眺めています。さらには自分でも持て余すほどに残忍な性格をしていることから、滅多に表には出てきません。

「マルイチ」と「マルニ」は私の中で常に主導権を争い、互いを軽蔑しあっています。それはエンジンとブレーキの関係性というよりは、異なる種類のエンジンがそれぞれ別の方向へ行こうとしているような印象です。

そんなことから「マルサン」はいつも置き去りにされたままで、“居ない”ことになっているとも言えます。

私もこれら三つの人格をなんとかブレンドさせて有効活用したいところですが、それぞれに自己主張が強く交じり合おうとしません。

私がこの場をお借りして発信を始めた趣旨は、一見近寄りがたい印象を持つPTAというチームの近況などを定期的に配信し会員の方に実情をお伝えすることで、その存在をなるべく身近に感じていただくというものでした。

それでも初めて本稿を目にし、冒頭の“人格の分断”というワードからまるで“狂人の独白”でも耳にしているかのような恐怖を抱いた方がいたかもしれません。もちろん私の人格はいわゆる完全な分断にまでは至ってはおらず、一応はひとつの人格として概ね統合的に機能していると自認しているところです。少し大げさな表現を使うのもどれかの人格、おそらく「マルイチ」の仕業だと思います。

今までの便りは全て本当に見聞きしたことをベースにお伝えしてきましたが、本稿では小説のようにあえて擬人化したような表現でお話したいと考えました。もっとも、現実には複数のメインパーソナリティを持った方を傷つけたりするような意図は決してありません。現に一個人の中でそれぞれ激しく主張し合う性格を持ち、苦しんでいる方とお話したことがあります、とても深い交流をさせていただいたことがあります。

毎月定例でオンライン開催されている本校PTAには実行委員会という会議がありますが、その会の冒頭に少しお時間をいただき、私からご挨拶させていただくことがあります。そこでご紹介しようと思っていたのに出来なかったものがありました。それは2024年の夏ごろに実施された勉強会で、その内容は近年社会的に知られつつある「ヤングケアラー」に関するものでした。

「ヤングケアラー」とは、本来家庭内で大人が担うべき役割を子どもがこなしてそれが当たり前のこととなってしまう、本来子どものうちに享受出来たであろう体験を受け取ることが出来ず、場合によってはその影響が将来にわたって重くのしかかってしまうというものでした。

私は専門家ではないのでその具体的な内容について詳述することは控えますが、この「ヤングケアラー」だった子どもたちが大人になったときに、いったいどんな心境を抱えて人生を歩むことになるのか。現状よりも数十年後の未来を想像してしまい、ずっと胸に引っ掛かっていました。

というのも、私が数年間にわたって調べ続けてきた心の発達に関する内容と極度に類似する内容だったからです。それら概念について、少し具体的な類型を紹介してみたいと思います。

「イネイブラー：世話役」

- ・ 家庭内の大人が本来の役割を果たさない時にそれを代わりに行うことで、不健全な状態を「可能にする人(enabler)」。
- ・ ただでさえ壊れている家庭がそれ以上に酷くなることを恐れており、生存戦略として料理や洗濯、下の子の面倒を見たりすることが多い。
- ・ 小さな頃から家庭をまとめて引っ張ってきたイネイブラーは、大人になってからも仕事などでリーダーのポジションにつくことがある。

きっと誰も人に言えないような何かをいくつか持っているはずですが、私の場合はそのひとつにこの“人格の分断”がありました。本当の人格がどれなのかは自分でもわかりませんが、偽物の顔と心の奥底にある何かとの著しい乖離によって、心のみならず身体まで蝕まれてきたと実感するようになりました。私は数年前から原因不明の体調不良に苛まれています。自分はずっと社会のクズだと思って生きてきました。

なぜこんな自己認識を持つに至り、そしてなぜそれを自覚した今も拭い去ることが出来ずにいるのか。誰かに相談することは出来なかったのも、私はかなりの長い時間をかけて、人知れずたくさんの本や情

報に答えを求め続けてきました。そしてついにその原因であろう尻尾を掴んだ、そんな気がしています。もちろん仮説に過ぎませんが、このことは私の中では既に確信へと変わっています。それは私の幼少期の体験にありました。

私は子どものころ小学校生活がそれほど楽しかったという思い出はありませんが、一日を過ごす中で比較的元気でいられた時間でした。毎日の中で本当に憂鬱になること、それは“家に帰ること”でした。

学校が終わるとその帰り道は友人たちと愉しく話しながら帰ることもあれば、一人下を向いて何か面白いものが落ちていないか、昆虫や草を観察したり石ころを蹴ったり、あるいは自分で決めた即席のルールに基づいて横断歩道の線の上を歩いたりして時間を忘れることもありました。

鍵を持っていた私が家につくと、しばらくの間、私は一人で過ごします。少しだけ安堵するのも束の間、私が一日の中で最も恐れている時間が始まります。私の一番近くにいる大人が帰ってくるからです。

そのときの出来事を具体的に書こうとはとても思いませんが、私はその大人の発する言動や表情をつぶさに読み取ろうとし怯えながら顔色を窺い、様々な自分を演出することで生き延びようと耐えていました。状況に合わせるように複数の人格が発現し、中年期に差し掛かっても自分がバラバラであるような感覚が拭えないのはこの時の体験によるものだと考えています。

私は今でも甲高い声で騒ぐ人がいる空間がとても苦手で、状況が許せばノイズ除去が可能なイヤホンを着用することがほとんどです。

ところで先ほどご紹介した概念の類型「イネイブラー：世話役」以外にも、幼少期の体験を通して中年期以降にわたり心の後遺症を残す類型があるものを少し列記してみます。

「ヒーロー：英雄役」

- ・ 家族の中で期待を一身に背負い、勉強やスポーツなどで成功することにより家庭内に希望をもたらしてくれる存在。
- ・ 反抗期がないなど外の人たちからは称賛されることから問題が隠されてしまうことがあり、表面的に見える情報でのみ判断される。
- ・ どれだけ結果を出しても褒めてもらえずに「まだまだ」と言われ続けることで達成感を覚えることが出来ず、成功しなければ存在価値がないという刷り込みが潜在意識に残り続け、より困難な課題を求めるようになる。
- ・ 自身を責めることに対する耐性が出来てしまい、どれだけ頑張っても結果を残しても満足することが出来ずに無理をし続ける。

「ピエロ：道化役」

- ・ 家庭内の雰囲気が悪くなった時におかしなことを言って空気を良くしようという脅迫観念を持っている。
- ・ マスコットのように可愛く振舞ったり、わざと馬鹿なふりをしたりもする。
- ・ いつもヘラヘラして何も考えていないように見せているが、家庭内では大人の顔色や様子を常に伺っている。
- ・ 大人になった時に必要以上に笑いを取ろうとすることがあり、面白い人と認識され、陰湿な雰囲気や気まずい空気は自らを貶めてでも何とかしようとする。

「ロストワン：失われた子ども」

- ・ 常に緊張状態で些細な刺激で雰囲気が悪くなるような家庭環境にいることから、感情と期待を持たないことにした。

- ・ 自分が攻撃されないために自分の存在を消すことさえする。
- ・ 育てやすい子だったと言われることがあり、周囲が大変なときに自分が迷惑を掛けてはいけないという極端な認識を持つ。

これらの類型やその概念には共通項があります。それは家庭内で健全な発達が出来ず、その体験が大人になっても消えず生きづらさを抱え、対人関係や実生活などで悩みを抱えることが多いというものです。そこには“未処理の感情”が横たわっていて、大人になってからも自分の欲求を出すことは少なく、自分のことは後回しにしたりします。特に怒りの感情を無意識に抑圧してしまう場合が多く、自分の感情に嘘をつき続けることでやがて心そのものを失ってしまうこともあるようでした。

これらの類型はほんの一部で、タイプごとに役割を演じ、それによって家族という機能をギリギリのところで維持したりします。全ては生き残るための生存戦略だったはずですが、抑圧した感情は心の底に溜まり続け、やがて悲鳴をあげることになります。

もっとも、これらの概念はいわゆる“オーソリティ”の中ではなかなか認識されず、ある意味では“居ない”とされているようですが、私は着実に存在するものと考え、また“当事者”として言及することくらいは出来ると感じます。

今までにも書いてきたことと重なるようですが、本校委員の構造的な問題は、ほとんどの委員は毎年一年単位で入れ替わるため、新しい委員の方は当然その都度初めての業務に戸惑います。それでも短期間に新しい人間関係を構築しながら、さらに前年度の実績を参考にして、必死に連絡を取って周囲の方と相談しながら何とか業務を行わざるを得ません。ようやく慣れてきたと思えばまた人が入れ替わってしまうというものです。

委員業務の一部を省略したり、他にももっと抜本的な“改革”をと唱える方はたくさんいますが、何かを辞めたり始めるということには膨大なエネルギーが必要となります。そしてその意見を具体的で実現性のあるプランに落とし込み、下調べや調整作業と必要な手続きを通して“改革”の実現を最後までやり遂げる人はごく稀です。

理由は痛いほどわかります。面倒なことは自分以外の誰かがやってくれればいいという他責思考に多くの大人が蝕まれているからです。私もそうです。ただでさえ日常生活が忙しく苦しければなおさらです。

その結果、現状に問題があると認識されているにもかかわらず、現状を維持することがコンフォート・ゾーンになるという矛盾した構造が長年続いてしまいます。

それでも多くの方がPTAというチームに何らかの形で関わった場合、どこかで厭な思いをすることがあったというのは悲しい事実のほうです。

そしてもうひとつ見逃せないことは、その厭な思いをされた委員の方が、退任後は後任者たちが自分より楽をするのは不公平でズルいとか、なぜかその負担の連鎖を継続すべきというような思考に陥ってしまうことがあります。

そこにはきっと“未処理の感情”が横たわっているのだと思います。本稿では毎回極端な仮説を提示しているのかもしれませんが、それでも私がこの仮説に辿り着いたとき、何かの構造に似ているような気がしました。決定的に、何かに似ていると。

想像ですが、先ほど列記した類型と同じような思いを強く残したまま大人になってしまった方が多くいらっしゃるのではないかと、自覚症状の差こそあれそんなふうに思います。

自分がただそこにいただけではその存在を赦すことが出来ず、常に何か努力し成果を出し続けなければならない、心の休息を感じることが出来ずに自分で自分を駆り立てているような感覚。この社会全体で見てのお話です。

仮にそうであるならどうしてこんなことになってしまったのでしょうか。

私たちが今ここに生きているということは、育ててくれた大人がいたはずで、多くの場合は親です。そしてその親もいたはずで、さらにその一世代前にも……。この辺りで何かの事実突き当たります。

それはこの国に生きた私たちのそう“遠くない祖先”たちが共通して体験した“ある恐ろしい出来事”に端を発しているように思えてなりません。その恐怖体験が根源的な価値観を奪い、無価値観を醸成し世代を超えて受け継がれることとなったのではないかと。常に自分や他者に何らかの成果を求め続けることでしかその存在意義を見出すことが出来なくなり、子どもにも無意識のうちに無価値観を伝播させてしまう構造が出来上がったのではないかと。

もちろんこれは原因の一つという意味であり、本当のところは国民性や社会構造などが複雑に絡み合っていて今の結果が見えているに過ぎません。少なくとも私はそうです。心にぽっかり空いてしまった穴に必死に努力という砂をかけて、それが見えないように目を背けてきました。

いずれにしてもこれらに端を発する構造的問題を、PTAという枠組みだけの問題として捉えようとする、目先の改善などに終始してしまいがちで、その対応策はきつとうまくいきません。この仮説をもった私がアプローチしたのは、まず委員の方から不安を取り除くことでした。本稿で詳述はしませんが、大人が少しでも心の安心を持ったうえで活動し、その顔を地域やその子どもたちに見てもらうことがそれだけで地域貢献に繋がるというものです。

私がお役目をいただいて見えてきた社会的課題があります。それは世代間のトラウマの連鎖を断ち切り、バラバラに分断された大人の意識を繋げ「統合」を起こすことからしか、この社会を新たに始めることは出来ないというものです。社会という大きな枠組みに対し個人が出来ることは小さいですが、少なくとも遠くない祖先が経験した恐れを次世代に引き継ぐのは、PTAの課題も含めてこの辺りで終わりにしたいところです。

私がPTAという全国にその名をとどろかせるこの悪名高い組織と向き合うことにしたきっかけは、理性担当を自負する「マルイチ」でも「マルニ」でもなく、意外にも普段は“居ない”ことになっている「マルサン」が始まりだったように思います。

幼少期に家庭内で生き抜くため、自分の存在を必死に消そうとして生まれたあの日の私、「マルサン:ロストワン」がなぜだか悲鳴をあげ続け、それを受けて「マルイチ:ピエロ」が発信や調整を、「マルニ:ヒーロー」が実務を進めるなど、私の中でちょっとした「統合」に近い連携が見られる恰好になりました。

“心の声を聴く”という表現がありますが、私にとってそれは心の最も奥深い場所に鎮座する人格と向き合うことでした。

こんな奇妙な便りをここまで御覧いただいた方はかなりの少数派だと思いますが、あなたの心の奥にある人格はどんな声を発していますか。激しい怒りでしょうか。それとも何かの悲鳴でしょうか。

どうやら私たちには、この世界で赦していない人物たちがいるようです。それはまず“遠くない祖先”。そしてもうひとり、“赦すことがもっとも難しい相手”。

傷ついても必死に生き抜いてきたあなたが、ずっと押し殺してきたその声に耳を澄ませたとき、未来の子どもたちに受け継がれるべき本当の世界が見えてくるかもしれません。
それでは、また。